The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	鷗外訳「惡因縁」と翻訳原本 : 訳者による削除と付加をめぐって
Author(s)	中, 直一
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2019, 2018, p. 1-12
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/72775
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

鷗外訳「悪因縁」と翻訳原本
―訳者による削除と付加をめぐって―

中　直一

1　はじめに

森鷗外はドイツ留学から帰国した 1888 年（明治 21 年）頃から盛んに翻訳を発表している。本論文で取り上げる「悪因縁」も、雑誌『國民之友』の第 80 號（1890 年〔明治 23 年〕4 月 23 日発行）から断続的に合計 9 回にわたって掲載されていて、初期鷗外の翻訳姿勢を伺うには格好の作品である。

初期鷗外の翻訳について、筆者はかつて「玉を懐いて罪あり」（E. T. A. ホフマン原作「スキュデリー嬢」）、および「新浦島」（アーヴィング原作「リップ・ヴァン・ウィンクル」）を分析し、鷗外訳の特質の解明を試みた[1]。「玉を懐いて罪あり」も「新浦島」も、いずれも言文一致体で訳文が構成されている。言文一致体で訳文が記されたこの二作を原文と対比して分析した結果、鷗外がかなり大胆な省略をする一方、原作にない創作的な付加をなし、また原文の意を汲んで相当に意訳ないし改変した訳文も提供している。これに対し、本論文で取り扱う「悪因縁」は文語体の訳文である。本論文執筆の当初の動機は、言文一致体の訳文と文語体の訳文で、鷗外の翻訳姿勢にどの程度差異があるのか、という問題の解明にあった。結論を予め述べるならば、文語体の翻訳「悪因縁」においても、かなり自由な訳文が示されていて、また省略や原文にない創作的付加も随所に見られる。本論文では、省略箇所と創作的付加に焦点を当て、初期鷗外翻訳作品の特質を解明したい。

2　鷗外が用いた翻訳原典と書き込み

「悪因縁」の原作はクライスト（Heinrich von Kleist, 1777-1811）の「聖ドミンゴ島での婚約」である。東京大学総合図書館の鷗外文庫には、鷗外手沢本が収められている。

Die Verlobung in St. Domingo. In: Deutscher Novellenschats. Bd.1, hrsg. v. Paul Heyse und Hermann Kurz, München, Verlag von Rudolph Oldenbourg 1871[2].

筆者は上記図書館よりコピーを取り寄せ、それを鷗外の訳文と対比する作業を進めた。なお鷗外文庫には、以下のレクラム文庫版クライスト全集も収められている。Heinrich von Kleist's sämmtliche Werke in zwei Bänden. hrsg. v. Eduard Grisebach. Erster Band. Leipzig, 1883[3]。ただしこの版には鷗外の書き込みはなく、「悪因縁」訳出に当たり鷗外がこの版をも参照したかどうかは不明である。ただし鷗外は、同じクライストの「チリの地震」を「地震」と題して訳出する際にはこのレクラム版クライスト全集を翻訳底本として使用しているから[4]、「悪因縁」を訳出するに当たりレクラム版を参照した可能性を全く排除するわけにはゆかない。

鷗外手沢本のうち、Deutscher Novellenschats 版には、多くはないが、鷗外自身の書き込みがある。そのうちの殆どは欄外に数字（及び切れ目示す ┌ 等の符号）を記しただけのもの

---

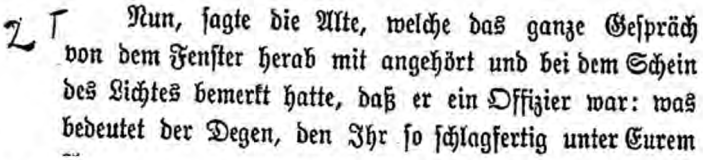
[1] 森鷗外『玉を懐いて罪あり』における翻訳技法（『言語文化共同研究プロジェクト 2002 言語文化の比較研究』2003 年）、鴎外訳「新浦島」に見られる翻訳技法（1）― 底本の語順をどう邦訳に生かすか ―（『言語文化共同研究プロジェクト 2013　言語文化の比較と交流　1』2014 年）、鴎外訳「新浦島」に見られる翻訳技法（2）― 過去形の羅列を避ける技法 ―（『言語文化共同研究プロジェクト 2014　言語文化の比較と交流　2』2015 年）、鴎外訳「新浦島」に見られる翻訳技法（3）― 異文化理解と文化変容の観点から ―（『言語文化共同研究プロジェクト 2015　言語文化の比較と交流　3』2016 年）、初期鴎外の翻訳に見られる創作的付加について ― 鴎外訳「新浦島」における主人公への感情移入 ―（『言語文化共同研究プロジェクト 2016　言語文化の比較と交流　4』2017 年。

[2] 発行年を 1871 年とする点は、岩波版全集（後述）の解題 p.657 による。

[3] 発行年は 1883 年と読んだが、鷗外手沢本では年号（現物画像 1883）の最後の一桁がかすれて判読しにくい。東大図書館の OPAC では、「1883?」と記されているので、本論文はそれを参考にした。

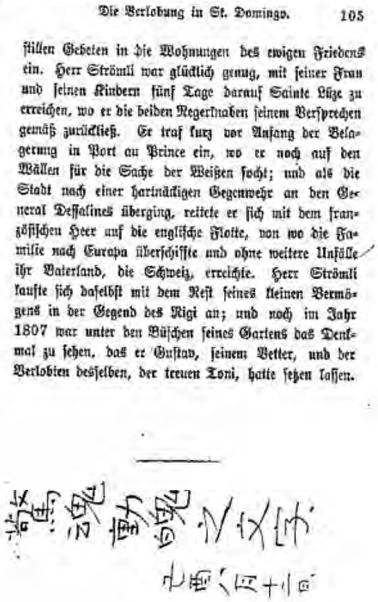
[4] 小堀桂一郎『森鷗外文業解題　翻訳篇』（岩波書店、1982 年）p.509。

である。例えば、以下の図は原文 S. 56 の一部である。


Nun, sagte die Alte, welche das ganze Gespräch von dem Fenster herab mit angehört und bei dem Schein des Lichtes bemerkt hatte, daß er ein Offizier war: was bedeutet der Degen, den Ihr so schlagfertig unter Eurem

こうした数字の書き込みは、2 から 9 までである。一見すると何の数字なのか分からないが、初出誌である『國民之友』を見ると、同誌に掲載された 9 回の掲載号（1890 年〔明治 23 年〕4 月～7 月）の切れ目と一致することが分かる。たとえば上図は、『國民之友』第 81 號に掲載された「惡因緣（其二）」の冒頭部分に相当する。また数字のうち 2 から 5 まではアラビア数字で記され、6 以降は漢数字で記されている。このことから、こうした欄外の数字は、鷗外が『國民之友』に翻訳を掲載するに当たり、1 回の掲載分を訳出し終えるたびに、次回の翻訳開始箇所を、自身の心覚えのために記したものと推測される。原文を分割掲載するに当たり、最初から分割箇所を予定して 9 回分の数字の書き込みを行ったのであれば、当然のことながら、アラビア数字か漢数字のいずれかに統一した書き込みになっているはずである。そうなっていないことから、鷗外が 9 回の翻訳掲載の都度、数字を書き込み、自身気づかぬうちに、途中から漢数字の書き込みになったものと推測し得る。

こうした数字以外に、文字の書き込みが見られるのは、ただ一箇所のみである。原文の末尾には、右図のように「驚魂動魄之文字　乙酉八月十二日」と記されている。「驚魂動魄」とは、原作が読者の魂魄を驚かせ、またそれを衝き動かすほどの迫力を有するものである、との意味であろう。また「乙酉」[5]とは、この近辺の年代では明治 18 年、すなわち 1885 年を指す。1885 年といえば、鷗外はまだドイツ留学中で、ライプツィヒにいた時代である。


Die Verlobung in St. Domingo. 105

stillen Gebeten in die Wohnungen des ewigen Friedens ein. Herr Strömli war glücklich genug, mit seiner Frau und seinen Kindern fünf Tage darauf Sainte Lüze zu erreichen, wo er die beiden Negerknaben seinem Versprechen gemäß zurückließ. Er traf kurz vor Anfang der Belagerung in Port au Prince ein, wo er noch auf den Wällen für die Sache der Weißen focht; und als die Stadt nach einer hartnäckigen Gegenwehr an den General Dessalines überging, reitete er sich mit dem französischen Heer auf die englische Flotte, von wo die Familie nach Europa überschiffte und ohne weitere Unfälle ihr Vaterland, die Schweiz, erreichte. Herr Strömli kaufte sich daselbst mit dem Rest seines kleinen Vermögens in der Gegend des Rigi an; und noch im Jahr 1807 war unter den Büschen seines Gartens das Denkmal zu sehen, das er Gustav, seinem Vetter, und der Verlobten desselben, der treuen Toni, hatte setzen lassen.

数字の書き込みと文字の書き込みに付された年号の両者を勘案すると、鷗外がこの書を少なくとも 2 回読んだことが分かる。すなわち、ドイツ留学中の 1885 年に原書を通読して「驚魂動魄之文字」との感想を書き込み、その後『國民之友』に 1890 年 4 月から 7 月にかけて「惡因緣」の掲載を行った際に、これを再読の上、数字の書き込みを行ったと目される。

数字と読後感以外の書き込みは（「 等の符号を除けば）存在せず、鴎外が未知のドイツ単語を調べたり、構文の切れ目に印を付ける等の作業をした形跡は全くない。従って、鷗外の翻訳技法を原書への書き込みから推測することは、残念ながら出来ない。

3　本論文で使用する略号等

本論文では書き込みのある鷗外手沢本 Deutscher Novellenschats 版を以下の岩波版全集版所収の鷗外訳と対比し、鷗外の翻訳の特質を究明する。

「惡因緣」『鷗外全集』第 1 巻、岩波書店、1971 年

なお本論文で鷗外全集から引用を行う場合、漢字については可能な範囲で原文通り旧漢字を使用したが、旧漢字の字体が筆者の使用する PC の環境にない場合は、新漢字を使用した。また仮名文字の繰り返し符号もなるべく鷗外全集の表記に従ったが、「くの字点」については横書き原稿で再現することは困難であるため、便宜的に仮名文字を繰り返した。

本論文においては、原文と鷗外訳を対比するが、原文理解のために「聖ドミンゴ島での婚約」の現代語訳として以下のものを参照した。

[5] 鷗外が記した文字のうち、「酉」の前の漢字を「乙」と読む点については、中村ちよ「ドイツ時代の鷗外の読書調査―資料研究―」（日本文学研究資料刊行会編『日本文学研究資料叢書　森鷗外』有精堂、1970 年）p.58 による。

佐藤恵三訳「聖ドミンゴ島での婚約」『クライスト全集』第１巻、沖積舎、1998 年

原文・現代訳・鷗外訳から引用を行うに際しては、引用文の掲載ページを、引用文の末尾に括弧に入れて示した。また改行を含む引用に関しては、紙幅の都合により追い込みで記載し、改行箇所をスラッシュで示した。鷗外訳では登場人物の人名にはサイドラインが付されている。本論文ではアンダーラインで表記した。またドイツ語原文及び現代訳において波線を引いた箇所は、鷗外訳において訳出されていないことを示すものである。鷗外訳において波線を引いた箇所は、原文にはない鷗外の付加を示す。また現代語訳にあるルビは、本論文における引用では省略した。

以下に鷗外訳を原文と対比するが、その前にごく簡単に「聖ドミンゴ島での婚約」の粗筋を記す。クライストのこの作品は、フランス革命の時代に、当時フランスの植民地があった聖ドミンゴ島（今日のドミニカとハイチがある島）で実際にあった、白人に対する黒人の武装蜂起を背景にした作品で、黒人側が入植者のフランス人と対立し、ひいては白人全てを殺害しようとする状況のなかで、伯父一家とともに逃げ出してきた白人の青年グスタフ（スイス人であるがフランス軍の士官）が、黒人側である混血の老女ババカンとその娘トーニ（ババカンとフランス人男性の間に生まれた子）の家に単身やってきて、この家が黒人側か白人側か分からぬままに助けを求めに来る場面から話が始まる。老女の二度目の夫ホアンゴは黒人側に立って戦い、青年が来た時はちょうど戦闘のため部下とともに遠征中であった。そのため老女は、青年をいったんはかくまい、野営中の青年の同行者（伯父一家）を、夫の帰還後にこの家におびき寄せた上で、一網打尽にして殺害しようと考える。娘も当初はその計略に加担し、わざと媚びを売って青年を惹きつけ、この家に宿泊させる。

ところがその夜、青年が語る身の上話に娘が心を動かされ、ついに二人は婚約者の間柄となり、娘は義父と母を裏切ってでもこの青年を助けようと思うに至る。母は娘の態度が変化したのではないかといぶかしむが、確たることは分からぬままにいた折り、予定より早く夫が部下を引き連れて帰還した。このままでは青年は即座に殺されると案じた娘は一計を案じ、眠っている青年を敢えて縛った。縛られた青年の姿を見て、老母はこれを人質にしたまま青年の同行者をおびき寄せ、一網打尽にして殺害すれば良いと提案する。一方、縛られた青年は娘が自分を裏切ったものと思い込む。夜も更けたので、父母や部下はそのまま寝静まるが、娘は縛られた青年に何も告げぬまま、青年の同行者が野営する森に向かい、ことの顛末を告げた上で、彼らを我が家に案内する。同行者たちは寝静まる黒人たちを急襲し、黒人の首領ホアンゴは負傷して敗北を認める。味方に縄を解かれた青年は、娘の姿を見るや激高してピストルを発射してしまう。周囲の者に真相を聞かされた青年は、早まった行動を悔い、そのままピストルでおのれを撃つ。これが「驚魂動魄之文字」と鷗外が評した物語である。

それでは、このような物語を鷗外が訳出するに際し、どのような箇所を省略し、どのような付加をなしたのか、実際に原文と鷗外訳を対比して検討を進めたい。

４　省略(1) ——挿入句など（副文や前置詞句）

まず鷗外が省略した箇所の検討から入る。鷗外は原文の様々な箇所を省略しているが、それらは２種に大別される。一つは、原文の内容に関し、鷗外が訳者としての価値判断を下した上で、敢えて訳出しなかったものである。もう一つは、内容云々という次元の判断でなく、機械的・形式的に、長文の一部（とりわけ副文や前置詞句など、文章の根幹というより、根幹の部分を修飾するような成分）を訳出しなかったものである。本節では、まず機械的・形式的な省略から取り上げる。

最初に取り上げるのは、登場人物の発言と発言の間の部分（ト書きに相当する部分）を鷗外が省略した例である。

〔原文〕— Junger Herr! sprach die Alte betroffen, was verlangt Ihr da?（S. 61）

〔現代訳〕「まあ、お若い方」老婆はうろたえて言った。「何をおっしゃるのですか。……」（p. 112）

〔鷗外訳〕媼、年若き人。何事をかのたまふ。（p. 482）

老母ババカンの台詞の途中に挿入されるト書の部分を、鷗外は省略し、読者の意識を台詞の部分に集中させる訳文を構成している。原文のドイツ語は、登場人物の台詞に引用符が付されず、また上記のように直接話法で記載される台詞もあれば、別の箇所では間接話法で記載される台詞もある。このように原文は複雑な書き方になっている。鷗外訳では、それらを全て直接話法的な訳し方に統一している（現代語訳も同じ方針で訳文を構成している）。ただし、鷗外訳でも引用符（カギ括弧）は使用されていない。そのため、ト書きに相当する部分を訳出すると、文章のつながりが非常に悪くなる。このような理由であろう、「惡因縁」にはト書きに相当する部分の省略が随所に見られる[6]。

このように、ある程度短い部分を翻訳で省略するケースは、原文でコンマとコンマで区切られる挿入句的な句においても見られる。次に検討するのは、ドイツ語原文で過去分詞を使用した副詞句（英文法で言う分詞構文）を、鷗外が訳文において省略したケースである。

〔原文〕Toni, während auf den Ruf Herrn Strömli's die Mägde herbeieilten, um ihrer Frau zu helfen, führte, von den Jünglingen mit Fragen bestürmt, Herrn Strömli und die übrigen Männer aus Furcht vor dem Knaben Nanky auf die Seite.（S. 94）

〔現代訳〕シュトレームリ氏のあげる声に下女たちが夫人の介抱にかけつけている騒ぎをよそに、トーニのほうは青年たちの質問攻めにあいながら、ナンキーに聞かれるのをはばかって、シュトレームリ氏と他の男たちを片隅へと連れ込んだ。（p. 140）

〔鷗外訳〕ストリヨオムリイに呼ばれて、婢等のはせ寄りて夫人を助けおこすひまに、トオニイはストリヨオムリイ父子をこかげに招きて事の顚末を語りぬ。こはナンキイの聞かむを憚かりてなり。（p. 503）

原文の骨格部分は、″Toni ... führte ... Herrn Strömli und die übrigen Männer ... auf die Seite.″という比較的単純な構文であるが、その単純な構文の中に多くの修飾語句が挿入されている。上の骨格部分では点線で示した部分が挿入の部分であるが、三つの挿入のうち、最初の部分を鷗外は訳し、二つ目を省略し、三つ目は別の文章に独立せしめて訳して、息の長い原文の文体を、すこしでも分かりやすく読者に伝えようとしている。

ト書きや分詞構文の他、鷗外は前置詞句や副文等の修飾成分もしばしば省略している。以下は、前置詞句と副文がまとめて省略された例である。

〔原文〕Hoango, dessen Kraft durch den Hieb über die drei Finger der Hand gebrochen war und der sein eigenes Leben im Fall einer Weigerung ausgesetzt haben würde, erwiderte nach einigem Bedenken, indem er sich vom Boden aufheben ließ, daß er dies thun wolle;（S. 97f.）

〔現代訳〕さっきの交戦で三本の指をくじかれて意気沮喪していたホアンゴは、これを拒めば自分の命も危ないと考えたらしく、しばらくためらった後、床から立たせて貰いながら、言う通りにするよ、と答えた。（p. 142）

〔鷗外訳〕痍を負ひて力脱けたるホアンゴは、この強迫に逢ひて暫し考へしが、辭まば我命も危からむとおもひて、心得たる旨を答へ……（p. 505）

これは物語の最終盤で、娘の手引きによって青年を助けに来た伯父一行が夜陰に乗じて黒人側を襲い、娘の義父ホアンゴが負傷し、相手の勧告に従って降伏を承知する場面である。原文の終わりの方にある″dies thun″とはホアンゴが部下に反撃を断念させることを指す。鷗外が省略したのは、前置詞″nach″で始まる前置詞句、および接続詞″indem″で始まる副文であり、いずれも文章の根幹である″Hoango ... erwiderte ... daß er dies thun wolle″を修飾する成分である。鷗外はここでも、最初の修飾成分（主語 Hoango を修飾する関係文）はそのまま翻訳し、第二の修飾成分（この中に、さらに前置詞句と副文がある）は訳出していない。つまり修飾成分の内、必要と判断した部分は訳出するが、話の展開に必ずしも必要がないと判断した部分は、適宜省略に及んでいるわけである。

---

[6] ただし、鷗外はト書きの部分を全て省略したわけではない。以下はト書きの部分を鷗外が訳出した例である。「娘は母の前に進みていふ。われは燭の光に面を照させしが、客の心は黒人の事のみおもひつゞけたるゆゑ、……」(p.483) これは挿入ではなく、台詞が始まる前に置かれた部分であるから、訳出した場合でも、台詞の流れを損なうことはないと鷗外が判断したのであろう。

このように鷗外の訳では、物語の理解を妨げぬ範囲で、原文にある短い句や文を訳出しないケースがしばしば見られる。ところが、訳出した方が読者の理解の助けになるような部分を、鷗外が敢えて訳出しなかった例がないわけではない。以下に鷗外が 4 単語のみからなる短い前置詞句の訳出を省略した例を紹介するが、ここは省略しないでおく方が、この後の叙述をよりよく理解出来たであろう箇所である。

〔原文〕Toni antwortete nach einer kurzen Pause, in der sie auf den Boden niedersah, daß ihn〔= den Brief〕der Fremde ja ihres Wissens wieder eingesteckt und oben im Zimmer in ihrer Beiden Gegenwart zerrissen habe!（S. 85）　〔 〕内は引用者付記。

〔現代訳〕しばらく黙って俯いてから、トーニは答えた。／「あら、あれだったらあの人がまたポケットに入れて、上の部屋でわたしたち二人のいるところで破いていたじゃない」（p. 132）

〔鷗外訳〕下を向きて少し踟蹰するさまなりしが、娘、手紙は客人のそのまゝに収めて二階に持返り引裂きて棄てたまふを見しやうなり。（p. 497）

この部分だけを見ると、原文の前置詞句を単に省略しただけに過ぎない。ところが内容上、この″in ihrer Beiden Gegenwart″はなかなかに重要な情報なのである。この短い語句が案外に重要であることを理解するためには、このトーニの発言の前後の文脈を考える必要がある。

白人青年一人が娘トーニと老母ババカンのいる黒人の家に助けを求め、彼女らが白人の味方であると誤解して宿泊し、森で野営する伯父一行に対して、すぐにこの家に来るようにとの手紙を青年が書いた後の場面である。手紙の内容を知った老母は、娘と自分の二人きりの所に青年の伯父一行が来ると、多勢に無勢で困ると考え、青年が書いた手紙を預かったまま戸棚に隠す。それを知った娘は、青年の一行に即座に来させるために、母が隠した手紙を取り出し弟に手渡し、野営中の一行に届けさせる。その後、戸棚を改めた老母が、手紙のないのに気づいた際、娘が嘘をついて母を騙すのが上の引用部分である。手紙は娘の計略ですでに青年の一行に届けるべく運び出されているのだが、娘はそのことを母に隠し、かつ、手紙がまだ戸棚にあると思っている母に対して、青年が既に「わたしたち二人のいるところで」破いたと信じ込ませている。鷗外訳ではこの後の部分で、母親はなお「われは確に受取りて此棚に置きつとおもふに、今見えぬはいぶかし。かく云ひつゝこゝか、そこかと捜せどなし。年老たる人の癖とて、物置忘るることもしばしばなれば、はては思絶えて娘のいふ如くならむといひぬ」（p. 497）と描写されている。最初は手紙を戸棚にしまった筈だと主張していた母が、最後には自分の記憶違いであったと納得する。そのような納得のきっかけは、娘の発言なのであるが、娘のその発言の中にある「わたしたち二人のいるところで」手紙を破り捨てたという部分は、母を納得させるためのかなり重要な根拠となっている筈だが、鷗外はその部分を省略した。これは、鷗外の省略が必ずしも全て内容上重要でないところばかりではない、ということを示している。

５　省略（2）――内容上の判断

前節で検討したような短い成分の省略の他に、鴎外の訳文には、内容上の判断から鷗外が訳出を控えたと考えられるものがある。たとえば、男女関係を暗示する部分である。以下に示すのは、青年グスタフと少女トーニが二人きりになった夜の場面である。かつての婚約者の悲劇的な死について涙ながらに物語る青年の告白に心動かされた少女は、青年の首に抱きつく。その後の描写は以下のようになっている。

〔原文〕Was weiter erfolgte, brauchen wir nicht zu melden, weil es jeder, der an diese Stelle kommt, von selbst lies't. Der Fremde, als er sich wieder gesammelt hatte, wußte nicht, wohin ihn die That, die er begangen, führen würde;（S. 73）

〔現代訳〕この結果がどういうことになったかは、ここまで読み進まれた読者には自ずからわかることなので、書きとめるまでもなかろう。再び平静をとり戻した客は、自分のしてしまった行為がどんな結果になるのか計りかねていた。（p. 123）

〔鷗外訳〕客はいまさらに怪しき縁の末いかならむと思煩ひけり。（p. 490）

上の引用で波線を引いた部分が、鷗外訳では欠落している。当該部分は、原作者クライ

ストが顔を出して、青年と少女の間に一夜の関係が生じたことを示している箇所である。原文自体が暗示にとどめた書き方をしているのだが、鷗外はそれさえ訳出しなかった。

この部分を鷗外が意図的に訳出しなかったことは、ドイツ語原文に対してなした鷗外の書き込みと、「悪因縁」の初出である『國民之友』を対比してみれば分かる。

Was weiter erfolgte, brauchen wir nicht zu melden,
weil es jeder, der an diese Stelle kommt, von selbst lies't.
⌈Der Fremde, als er sich wieder gesammelt hatte, wußte
nicht, wohin ihn die That, die er begangen, führen würde; 5

悪因縁（其五）
クライスト著
鷗外漁史譯
客はいまさらにあやしき縁の來いかならむと思煩ひけり、されど我身のこれにて難をまぬかれて此家のうちにて娘の方より殘忍なるふるまひなかるべきをも知り

上図の「5」及び ⌈ の書き込みは、〈この箇所から『國民之友』の「悪因縁（其五）」の訳が始まる〉、という意味の鷗外の書き込みである。

右図は『國民之友』の復刻本であるが[7]、それを見れば、ドイツ語原文に鷗外が「5」と記した部分（すなわち原文の 3 行目に相当する部分）から「其五」の訳文が始まっていることが分かる。

このことから分かるように、鷗外は『國民之友』に「悪因縁（其五）」を掲載するに当たり、訳出の順序としては、ちょうど区切りのよい新段落の冒頭部分に差し掛かっていたにも拘わらず、敢えて新段落冒頭の 2 行を訳出せず、3 行目から翻訳を開始したのである。

その理由は何か。一つには、男女間に関係が生じたことを暗示することさえ憚られるという、一種の自己規制が鷗外の心に中で働いた、という推測が成り立つ。ただし、原文そのものがかなり暗示的であるので、それをさらに省略すべきであると考えるほどの規制がどの程度強かったのか、筆者は今ひとつ断定的な事が言えないでいる。

もう一つの理由として、作者がいきなり顔を出して事態の進行を説明する、という原文の書き方を訳者鷗外がよしとせず、むしろこれを省略した方が文章の続き具合がよくなると判断した、という推測も成り立つ。初出の『國民之友』では、「其五」が始まる部分であるので、その冒頭に原作者が自らの語りをなすような記述を置くことは、『國民之友』で「悪因縁」の掲載を読む読者にとって、むしろ唐突の感を与えると鷗外が判断したかも知れない。もっとも、この推測も、それほど強く主張し得るものであるかどうか、筆者自身迷っている。『國民之友』は 10 日おきに発行されており、上記の省略箇所を含む「悪因縁（其五）」の前の「悪因縁（其四）」掲載号である『國民之友』第 84 號（明治 23 年 6 月 3 日発行）から 10 日後に続きを読む読者が、原作者の語りに接した場合、どれほど違和感を覚えるか、確定的なことは言えないからである。

第三の理由として推測し得るのは、鷗外が訳出を開始した原文の第 3 行目の訳文における「怪しき縁」という文言である。上に示した原文及び現代語訳から分かるように、訳語「怪しき縁」に直接相当するような語句は、クライストの文章の中には存在しない。原文の"die That, die er begangen"は「彼がなしてしまった行為」という意味であり、彼すなわちグスタフの行為を表す。一方「怪しき縁」は青年と少女との因縁を指す表現であるから、「怪しき縁」と「彼がなしてしまった行為」では指し示す内容が違う。違うにも拘わらず、鷗外はそれを承知で、敢えて視点を変えたと考えられる。

原作者クライストがこの作品に与えたタイトルは「聖ドミンゴ島での婚約」である。鷗外はこれを、「悪因縁」という、作品の内容を端的に示す日本語に移し替えた。だが『國民之友』に掲載された「悪因縁」の其一から其四までの部分で、何が悪しき因縁なのかについての直接的言及はなかった（訳文なので当然のことだが）。鷗外は、其五の冒頭部を訳出するに当たり、「悪因縁」なる標題を与えた意図を訳文の中に込める好機を見いだし

[7] 『國民之友』第 6 巻（明治文献、1966 年）p.210。（この復刻版の表紙では『國民之友』と記されているが、奥付では新漢字の『国民之友』という表記が使用されている。）なお初出の巻号及び日付は『國民之友』第 6 巻 p.851（第 85 號 p.23）、1890（明治 23）年 6 月 13 日発行である。また『國民之友』の句読点の表記は岩波版全集のそれと異なり、句点がなく、読点も非常に少ない。

たのではないか。もしその解釈が正しいとすれば、鷗外が自ら与えた「悪因縁」という標題の意味を、より強く読者に意識させるため、敢えて原文の新段落冒頭2行を訳出することなく、掲載第五回の冒頭で「悪因縁」の意味を読者に印象づける形で示した、とも考えられるのである[8]。

次に見るのは、鷗外が原文の一部を完全に省略したのではなく、抄訳のような訳し方をしている例である。その結果、原文の10行が鷗外訳（全集版）では2行になっている。

〔原文〕Toni, halb im Bette aufgerichtet, indem die Röthe des Unwillens ihr Gesicht überflog, versetzte, daß es schändlich und niederträchtig wäre, das Gastrecht an Personen, die man in das Haus gelockt, also zu verletzen. Sie meinte, daß ein Verfolgter, der sich ihrem Schutze anvertraut, doppelt sicher bei ihnen sein sollte, und versicherte, daß, wenn sie den blutigen Anschlag, den sie ihr geäußert, nicht aufgäbe, sie auf der Stelle hingehen und dem Fremden anzeigen würde, welch eine Mördergrube das Haus sei, in welchem er geglaubt habe seine Rettung zu finden.（S. 76f.）

〔現代訳〕トーニは気色ばんで顔を真っ赤にしながら、ベッドの上に半身を起こすと、こう言った。／「わざわざ人を家に誘い入れておきながら、そんなやり方で客として受ける権利を踏みにじるのは、汚いことだし下品なことよ。追手を逃れて来た人がわたしたちの助けを心頼みにしているのだったら、ここにいるのが倍も安全だということを見せてやらないといけないと思うわ。お母さんが話していた血なまぐさい計略をとりやめないというのなら、すぐにも客のところへ出かけて行って、自分が助かったと思っているこの家は、それどころか実は人殺しの巣窟なのだと言ってやるから」（p. 125）

〔鷗外訳〕トオニイはこの時半ば床より起きあがりしが、面に怒をあらはして、又もさる恐ろしき心をおこし玉ふか。つゆ疑ふ心なき客人をかくまで欺かむとのたまはゞ、われ往きて眞を打明けむ。（p. 491）

上の引用では、鷗外が省略したと言える箇所に波線を引いておいたが、これらは純然たる省略ではなく、鷗外訳には原文の意を汲んだ短い文ないし語句が置かれている。

上記の引用の前後の文脈を示す。相手をひとまず安心させて宿泊させ、その後夫ホアンゴと部下の帰還をまって、青年（及び野営している青年の伯父一行）を一挙に殺害しようとする計略を有する母に対し、当初その計略に加担したものの、青年の真情に接して心を変えた娘トーニが反論する場面である。物語の展開としては、無邪気に父母の方針に従っていた娘が、一夜の後に青年の婚約者となり、自立した一人の大人として、自己の新たな考えを母に述べる重要な箇所である。この部分を翻訳で省略するにはそれ相応の理由が必要になろう。

原文では、娘が母親に対し、極めて理路整然と、(1)誘い入れた相手の「客として受ける権利」(Gastrecht)を損なうことが恥ずべき行為であること、(2)自分を保護してくれるものと信頼しきっている避難者に対しては、通常に倍してその安全を確保すべきものであること、という二点の論拠を挙げ、その上で、(3)敢えて母がこの「血なまぐさい計略」(blutige(r) Anschag)を断念しないならば、直ちにこの家が「人殺しの巣窟」（Mördergrube）であることを青年に暴露すると、かなり激烈な表現を使用して、徹底的に母親に反論している。このような発言は、反論であり、かつ抗弁とも言えるような論の展開ぶりを見せて

---

[8] 「因縁」という訳語に関しては、この部分以降で次のような鷗外の訳が見える。「トオニイいひけるやう。我家にグスタアフ君を宿せしときは、しかじかの心ありて僞をのみ旨とせしに、二人さし向ひになりて物語したる末、いかなる因縁にや主客の關係頓にかはりぬ」(p.503)。原文は"Sie erzählte den Männern, ihre Thränen vor Scham und Reue nicht zurückhaltend, Alles, was vorgefallen; wie die Verhältnisse in dem Augenblick, da der Jüngling eingetroffen, im Hause bestanden; wie das Gespräch, das sie unter vier Augen mit ihm gehabt, dieselben auf ganz unbegreifliche Weise verändert; ... "(S.94f.) これはトーニが青年を縛り、父母の前では黒人の側に加担したように見せかけつつ、夜陰に乗じて家を抜け出し、青年の一行が野宿している森に駆けつけて、事の顛末を述べる部分である。原文の"auf ganz unbegreifliche Weise"は「全く不可解な様態で」という程の意味であるが、鷗外はこの部分を「いかなる因縁にや」と訳出している。先に引用した「怪しき縁」は純然たる鷗外の創作的付加であったが、ここでの「いかなる因縁にや」は、ドイツ語原文を鷗外が、日本語訳の標題「悪因縁」に引きつけて訳出したものと目される。

いる。

原文のこうしたありように対し、鷗外訳では、論拠を挙げて抗弁するという色彩が弱まり、白人殺害の計略を棄てぬ母親に、娘は「さる恐ろしき心をおこし玉ふか」と、その情に訴えて殺害を思いとどまらせようとしている。また原文の″welch eine Mördergrube das Haus sei, in welchem er geglaubt habe seine Rettung zu finden″は、直訳するならば「彼が救われたと思い込んだこの家が、どれほどの人殺しの巣窟かということを」という意味だが、鷗外はこの長い文章を「眞を」の一表現で済ませている。つまり、母の情に訴え、また「人殺しの巣窟」等の激烈な表現を敢えて避けたわけである。

鷗外は、なぜこのような省略ないし改変をなしたのか。いずれも推測の域を出ないが、三つほどの理由が考えられる。まず第一には、少女が長々と反論する原作の構造を採用するよりは、むしろ短い発言に切り詰めた方が話の展開がスピーディーになると訳者鷗外が判断したという推測。第二に挙げられるのは、少女が母親に対して反論する場面において、理路整然たる抗弁よりは、母の人間としての情に訴える方が当時の日本の読者にはふさわしいと鷗外が判断したという推測である。そして最後に、殺害を強調する表現を鷗外が好ましいものとは判断しなかったことも挙げられる。

最後の推測に関しては、同種の省略が「惡因縁」に見られる。それは、白人の旅人が老母と娘の家に宿泊を求めに来た場合にとる母娘の行動（ただし青年が登場する以前）を述べた部分である。それは、原文″und wenn Congo Hoang mit seinem Negertrupp von den Streifereien, die er in der Gegend gemacht hatte, wiederkehrte, war unmittelbarer Tod das Loos der Armen, die sich durch diese Künste hatten täuschen lassen.″（S. 52）、現代訳「コンゴ・ホアンゴが黒人の一隊をしたがえて、近隣一帯の警邏を終えて帰って来れば、こうした手くだによって欺かれた憐れな白人の上には、ただちに虐殺の運命が待っていたのである。」(p. 104) という部分で、鷗外訳では抄訳どころか、この部分がまったく訳出されていない。この省略部分に関しても、鷗外が″unmittelbarer Tod″（直訳すれば「直接の死」）という表現を含む部分の訳出を避けたものと考えられる。

本節でここまで検討してきた例に関しては、鷗外訳における省略には、それなりの理由があった。だが、それでは全ての省略箇所に合理的な理由があったかというと、必ずしもそうではない。それどころか、省略を施すことによって、文脈の理解に多少なりとも支障を来す例がないわけではない。

たとえば、青年の命を救いたいと思う余り、いったんは母に対して強く抗弁した娘が、その後思い直し、母には本心を隠す方がかえって青年の命を救うことになるものと考え、青年の殺害に賛成する旨を母に伝えたあとの、母の発言の場面である。

〔原文〕 Beim Himmel, diese deine Erklärung rettet ihm für heute das Leben! Denn die Speise, da du ihn in deinen Schutz zu nehmen drohtest, war schon vergiftet, die ihn der Gewalt Congo Hoango's,[9] seinem Befehle gemäß, wenigstens todt überliefert haben würde. — Und damit stand sie auf und schüttelte einen Topf mit Milch, der auf dem Tische stand, aus dem Fenster. (S. 79)

〔現代訳〕「驚き桃の木だね、お前がそんなふうに言うんだったら、あの男の命も今日のところは見逃してあげよう。実は、お前があの男をかばおうとする心配があったから、食事に毒を入れておいたところさ。コンゴ・ホアンゴの言いつけ通り、万一というときには死体にしてでもあの人の手に渡そうと思ってね」／そう言うと立ちあがって、テーブルの上にあった牛乳鍋を窓の外にあけた。（pp. 127-128）

〔鷗外訳〕さても客の幸多さよ。汝が言葉にて今日の命は助かりぬ。／言畢りて起ちあがり、卓の上なりし一碗の牛乳を窻の外へ棄てぬ。(p. 493)

鷗外訳では何故母ババカンが牛乳を窓の外に棄てたのか、理由がはっきりしない。原文

[9] 本論文における引用では、Hoango's の後ろにコンマを付して記したが、鷗外文庫所蔵本ではセミコロンにも見える（現物の画像 Hoango's;）。文脈上コンマでないとおかしいし、鷗外手沢本のセミコロンに見える部分は、ひょっとするとインクのシミの類かも知れないので、本論文における引用ではコンマにしておく。なお本論文冒頭で触れたように鷗外文庫にはレクラム版クライスト全集が収められており、その版では当該箇所はコンマになっている（Kleist, a.a.O. S.282　現物の画像 Hoango's,）。

では食事に毒を入れて青年を殺そうとしていたことが明示されている。内心青年を助けたいと思う娘の方便に、老母が一応は納得し、青年の毒殺を思いとどまったことが、毒入りの牛乳を棄てたということから分かる。つまり非常に重要な部分であるが、このように重要な点を鷗外は敢えて省略している。いま「敢えて」と書いたが、これが訳者鷗外の計算に基づくものであるのか、それとも上手の手から水が漏れる類いのものなのか、はっきりしない。いずれにせよ、鷗外訳の読者にとって、老母が牛乳を窓の外に棄てたという行動の理由については、訳文からはうかがい知ることが出来ないままである。

６　付加(1)　――　説明的な補足

本節及び次節では、原文にない文章を鷗外が訳文の中に付加した場合について検討を進める。まず本節で見るのは、原文で示されている内容を、読者がより理解しやすいように鷗外が補足的な文章を訳文の中に書き込んだ場合である。

以下の例は、黒人の反乱軍の目を避け、夜間に助けを求めにやって来た青年を娘が出迎える、物語の最初の方の場面である。青年は、助けを求めたものの、その家の住民が黒人側か白人側か分からぬままの状態である。娘は、かねて母から言いつけられていたように、白人を安心させて我が家に招き入れ、その後、義父の帰還を待って殺害に及ぶつもりである。娘の任は、まずは白人を安心させて我が家に導き入れることである。

〔原文〕Sie trug Sorge, indem sie dies sagte, das Licht so zu stellen, daß der volle Strahl davon auf ihr Gesicht fiel.（S. 55）

〔現代訳〕彼女はこう言いながら、光がまともに自分の顔にあたるようにわざと角燈を持ちあげた。（p. 107）

〔鷗外訳〕トオニイは燭を把りたるが、勉めて光の我顔を射るやうにしたり。こは面の黒からぬを見せむとてなりけり。（p. 478）

原文では、この家の娘トーニが夜間に、灯火の光が自分の顔を照らすようにランタンを持ち上げた、ということしか書かれていない。こうした行動の理由について、原文ではこれ以上書かれていないが、鷗外はその理由を訳者の裁量で書き込んでいる。つまり娘の顔が白いこと（彼女の母ババカンは黒人と白人の混血で、実父は白人）を相手に見せることによって、その家の住人が白人側であると相手に信じ込ませる、という理由を敢えて読者に向けて書き込んでいるわけである。

もう一つ、鷗外が訳文の中に説明的な字句を付加した例を紹介する。

〔原文〕Die Alte, die gleichfalls vor das Mädchen hingtreten war, stemmte die Arme kopfschüttelnd in die Seite ...（S. 91）

〔現代訳〕同じように娘の前に進み出ていた老婆のほうは、頭をかしげながら両手を腰につっぱって ...（p. 137）

〔鷗外訳〕媼もあたりに歩みよりしが猶疑の霽れねばか、頭打かたげて、もろ手を腰のあたりにあてたり。（p. 501）

これは、物語の終わりの方で、夫ホアンゴが部下を連れて突然帰還した際、娘の手引きで白人青年が逃げ出したと老女が騒ぎ出した後の場面である。娘は青年を助けるため、機転を利かせてわざと青年を縛ったが、表向きは父母の為に青年を縛ったと主張する。その言葉を義父はそのまま信じるが、母は未だに娘が青年と通じているのではないかといぶかしむ。原文では、老母が首をかしげながら腰に手を当てた、と書かれているのみである。これだけで十分に、なおも娘を疑う老母の気持ちが表現されているのであるが、鷗外はさらに「猶疑の霽れねばか」と、娘に対する母の疑念を直接表現する字句を訳文に書き加えた。こうした付加を、読者の理解のために訳者が行った相応の処理と考えるか、それともあらずもがなの補足と考えるかについては、判断の分かれるところであろう。鷗外としては、説明的な付加をここで書き加えることを選択したわけである。

７　付加(2)　――　創作的付加

原文にない付加については、前節で検討したような状況説明を原文以上に行う補足のほかに、物語の登場人物の発言部分に対して、訳者鷗外がさらに発言内容を膨らませて追加

したケースが見られる。以下は、青年グスタフが老女ババカンに対し、自分たちをかくまうよう、具体的な方策を次々に提案する場面である。

〔原文〕Warum nicht? versetzte der Fremde dringend; wenn ich sogleich selbst an den Möwenweiher hinausginge und die Gesellschaft noch vor Anbruch des Tages in die Niederlassung einführte; wenn man Alles, Herrschaft und Dienerschaft, in einem und demselben Gemach des Hauses unterbrächte und für den schlimmsten Fall etwa noch die Vorsicht gebrauchte, Thüren und Fenster desselben sorgfältig zu verschließen? (S. 61)

〔現代訳〕「また、どうしてですか」と客は気負いこむように言った。「ぼくがこれからすぐかもめ池へ出かけ、夜の明けぬうちにこの入植地へ全員を連れて来たとしたら、主人だの使用人だのの区別を設けず、一つの広間にたてこもり、万一の場合のために用心して、その部屋のドアも窓もしっかり鍵をかけておいたとしたら」(pp. 112-113)

〔鷗外訳〕客、さなのたまひそ。我身今より自ら池のあなたへ往き、人々を促したてゝ、夜の明けぬまにこゝへ伴はゞ[10]、人の知得べきにあらず。猶心もとなくおもひたまはゞ、人々一間に籠もりて、戸を閉ぢ、外に出でずば、いかに疑深きものなりとも探知ること難からむ。(p. 482)

原文では、助けを請う青年が、老女に対して単に方策を述べているだけである。ところが鷗外訳では、相手を安心させるような文言が付加されている。「人の知得べきにあらず」の部分では、隠蔽工作が周囲の人に気づかれる恐れがないことを述べて、青年が老女を安心させようとしている様が付加され、「猶心もとなくおもひたまはゞ」の部分では、なおも不安を懐く様子の老女に対して、第二の提案を述べる前置きとして相手の不安を打ち消す言葉が置かれている。そして提案の最後の部分では、「いかに疑深きものなりとも探知ること難からむ」と、これまでの発言の総括となる文言を加え、相手をさらに安心させるような締め括りの発言を創作している。

原文にないこのような創作的付加は、前節で検討したような補足――すなわち、物語の進行を示す地の文において、状況をより分かりやすくするために書き加えられた説明的補足――と異なり、登場人物の発言の部分で書き加えられたものであり、訳者鷗外が原作者になり代わり、登場人物の心情（ここでは、迷う老女に対して何とか説得を成功させようとする青年の焦りと執念）を、より強調した形で叙述しているわけである。

このような創作的な付加は、この物語の二人の主人公（青年グスタフと少女トーニ）の、いわば敵役とも言える老母ババカンの発言の部分にも見られる。以下に示すのは、青年の命を助けようと提案した娘に対し、老母が反論する部分である。原文（間接話法で記されている）において老母は、今まで何人もの白人を計略に掛けて殺害してきた現実を娘に再認識させようとして、次のように述べる。

〔原文〕Sie wollte wissen, was man den drei Franzosen und so vielen andern einzelnen Flüchtlingen vom Geschlecht der Weißen zur Last gelegt habe, die mit Büchsen, Spießen und Dolchen seit dem Ausbruch der Empörung im Hause hingerichtet worden wären. (S. 77)

〔現代訳〕それに騒ぎが起こってからこっち、三人のフランス人と白人に縁のある沢山の避難者だって、銃や槍や短刀などで処刑されたけれど、そんな人たちにどんな咎目があったのか、聞かせて欲しいもんだね（p. 126）

〔鷗外訳〕其外鎗、劍、鳥銃などもて此家の内にて殺しゝ許多の白人も、ひとりびとりに問はば、なでふ罪科あるべき。今遽におもひ出でたるやうに、客人の罪のありなし問ふこそこゝろえね。(p. 492)

ドイツ語原文の主語 Sie は老母を指す。上に述べたように、原文は間接話法で記され、処刑された白人たちは、ただ白人であるという理由のみで黒人側に処刑されたのであり、個人としてはどのような罪を犯したのか知りたいものだという、一種の反語疑問になってい

[10] 「ゞ」は、岩波版全集では「ば」と記載されている。これは同全集で「ば」の文字が偶々行頭に位置したために、禁則処理により「ば」と記載されている。本論文の引用では、行頭に位置しないので、他の箇所の記載にならって「ゞ」と記す。

る。これまで白人を計略に掛けることに加担してきた娘も、処刑された白人ひとりひとりが個人としては何の罪もないことをすでに十分承知している筈である、ということを、老母は言外の言で娘に述べている。そして老母の問いかけは、原文ではここで終わっている。つまりこれ以上、老母は娘の心変わりを追求する言葉を述べていない。

このような原文に対し、鷗外の訳文では、老母がさらに「今遽におもひ出でたるやうに、客人の罪のありなし問ふこそこゝろえね」と述べ、老母の苛立った感情をより強く読者に印象づける構造になっている。

物語の中で、老母は終始黒人の側に立つが、娘は白人青年の命を救うべく、白人の側に寄り添うように態度を変える。しかもそのことを、娘は母に隠す。このような娘の態度に対し、老母は半ば信じ、半ば疑いを捨てきれぬままに、物語は進行する。物語ではこうした微妙な関係が続くのだが、老母が娘を半ば疑い始める最初の部分（上記引用部分）の叙述において、鷗外は原文にない文言を書き加え、娘に対する老母の疑いの念を強調している。つまり、娘に対しする疑念が母親の心の中に生じ始めた様子を、鷗外は原文以上に明確化しようとしたわけである。

こうして、登場人物の心情をより明確に訳文の中に書き込もうとする手法は、次の例に現れている。戦闘のため不在で、しばらくは帰還することはないと思われていた父ホアンゴが、配下の兵士を連れて急に戻ってきたことに驚いた娘が、一計を案じて、父の留守中にかくまった白人青年を、その睡眠中に敢えて縛った後の場面である。娘は縛った青年を部屋に置き去りにしたが、父母は青年が逃げたものと勘違いして、娘が手引きをしたと決めつける。

〔原文〕Babekan, welche die Thür ohne hineinzusehen offen gefunden hatte, rief, indem sie als eine Wüthende zurückkehrte: Die Gaunerin! Sie hat ihn entwischen lassen! Eilt und besetzt die Ausgänge, ehe er das weite Feld erreicht! — Was gieb's? fragte Toni, indem sie mit dem Ausdruck des Erstaunens den Alten und die Neger, die ihn umringten, ansah. — Was es giebt? erwiderte Hoango, und damit ergriff er sie bei der Brust und schleppte sie nach dem Zimmer hin.（S. 90）

〔現代訳〕バベカンは室内を覗きもせずに、ドアが開けられたままなのを見ると、逆上した顔もあらわに戻ってきて叫んだ。／「この猫かぶりめ。あいつを逃がしてしまってる。さあ急いで、あいつが遠くへ行ってしまわないうちに、出口を固めなさい」／トーニはあっけにとられた顔をして、「なんの騒ぎなの」とホアンゴや彼を囲む黒人たちを見つめて尋ねた。／「なんの騒ぎだと」／ホアンゴは、言ったが早いか少女の胸ぐらをつかまえ、部屋のほうへと引きずって行った。(p. 136)

〔鷗外訳〕バベカン面色變はりて、二足三足たちもどりていふ。憎き女、善くもたばかりしよ。旅人は早や逃げたり。遠くはまだ行かじ。人々疾くゆきて口々を固めずや。／トオニイ、何事のありてか斯くは騒ぎたまふ。かくいひて驚きたるさまにて黒人主從を打まもりてをり。／ホアンゴ、猶しらじらしき氣色を見するよと、胸さき引捉へて、客の居たりといふ室へ引きもてゆく。(p. 500)

娘の態度を半ば疑いつつも、なお娘の言の真なることを願っていた老母と義父が、信頼を裏切った娘を、それだけ一層強く責める場面である。鷗外は老母の発言の部分にも、また義父の発言の部分にも、いずれも原文にない文言を付加し、娘に対する親の怒りを原文以上に強調している。

以上検討してきた三例では、いずれも登場人物の発言の部分に鷗外が創作的付加をなし、彼らの感情の発露をより明確化するよう改作したものだが、最後に地の文において鷗外が施した創作的付加を検討する。

〔原文〕doch auf die erste Frage antwortete Toni nicht, und auf die andere versetzte sie, indem sie sich aus seinem Arm loswand: Nein, wenn Ihr mich liebt, kein Wort! Sie unterdrückte die Angst, die alle diese lügenhaften Anstalten in ihr erweckten; und unter dem Vorwand, dem Fremden ein Frühstück zu bereiten, stürzte sie eilig in das untere Wohnzimmer herab.（S. 83）

〔現代訳〕しかし、トーニのほうは前の質問には答えず、第二の質問に対してだけ、からむ腕から身をほぐしながら、／「だめ、わたしを愛してるなら、一言もいわない

で」／罠にはめるためのこうした手段が着々と進められていくのを見て、トーニは不安を覚えたが、それをぐっとこらえた。客の朝食の用意がありますからととりつくろって、下の居間へと急いで駈けおりて行った。(p. 131)

〔鷗外訳〕娘は母もや見ると氣遣ふさまにて客の手をほどき、此身をだに棄てたまはずばいかでか告げむ。／母の詭計を目の前に見る少女が心苦しさはいかならむ。さればとて眞を告げむよしなければ、まらうどに朝げまゐらせばやといひさして、急ぎて梯を下りぬ。(p. 496)

青年と娘が一夜をともにした後、青年が娘に対し、夕べはよく眠れたか、また二人の関係を母に告げるべきか、と二つの問いかけをなしたのを受けて、娘が応じる場面である。原文では、娘がこの二つの問いかけのうち前者には答えず、後者にのみ答えた旨が記されているが、鷗外はその部分を省略し、それに代わり、母の目を気にする娘の様子を創作的に付加している。さらに鷗外訳では、母の詭計を青年に打ち明けることの出来ぬ少女の板挟みの心情も書き加えられ、原作よりも少女の困惑を強調した文章となっている。さらに言えば、「少女が心苦しさはいかならむ」という鷗外訳についても、原文の″Sie unterdrückte die Angst″（彼女は不安を押し殺した）の部分の大胆な意訳とも取れるし、あるいは原文の当該部分を省略の上、新たに鷗外が創作的に付加したともとれる、微妙な訳文になっている。もし後者であるとすると、鷗外が少女の困惑を作者に代わり直接述べたことになる。

このように鷗外の「悪因縁」には、単に登場人物の台詞の部分のみならず、地の文においても、訳者としての分限を鷗外が多少踏み越えて、いわば作家的な立場から創作的な付加を行っているのである。

８　おわりに

本論文において筆者は「悪因縁」における省略及び付加を検討した。紙幅の都合で触れることは出来なかったが、この他に「意訳」という次元をかなり越えた、原文を相当に改変した訳が随所に見られる。こうした改変訳についても、折りあらば検討したいが、これに加え筆者としては、鷗外の訳文についての細かな検討と平行して、鷗外の翻訳を明治翻訳界の中に位置付ける作業も重要であると考えている。本論文で取り上げた例だけを見ると、ひとり鷗外のみが、翻訳の営みにおいて作家的個性を発揮したように誤解されかねない。しかし、明治時代に見られた諸々の翻訳に対して奉られた「義訳」[11]、「乱訳」[12]、「豪傑訳」[13]等の呼称から分かるように、明治時代の翻訳は、全般的にかなり自由かつ大胆であった。鷗外の翻訳も、そのような明治翻訳界全体の流れの中で考察するならば、決して特異なものではなかった。我々としては、このことを踏まえた上で、なお鷗外らしい翻訳の在り方が奈辺にあるのかを究明してゆきたいと思うものである。

付記　本論文は平成 29～31 年度科学研究費助成基盤研究(C)（一般）「異文化受容及び文化変容としての森鴎外初期翻訳作品の研究」（課題番号：17K02592）による研究成果発表の一部をなすものである。

[11] 木村毅「日本飜譯史概觀」(『明治文學全集　第7巻　明治飜譯文學集』筑摩書房、1972 年) p.375
[12] 吉武好孝『明治・大正の翻訳史』(研究社、1959 年) p.45
[13] 吉武上掲書同頁、及び柳田泉『明治初期の飜譯文學』(松柏館、1935 年) p.38